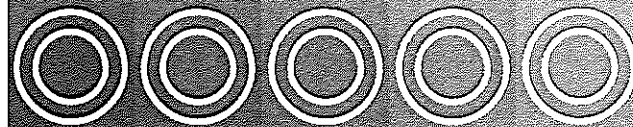


# 創世ホール通信 No.267

催し案内 + 文化ジャーナル  
2017年4月1日発行 ■北島町立図書館・創世ホール  
電話088・698・1100◎ファクシミリ088・698・1180  
771-0207◎徳島県板野郡北島町新喜来字南古田91◎



## 徳島クリエイターズマーケット

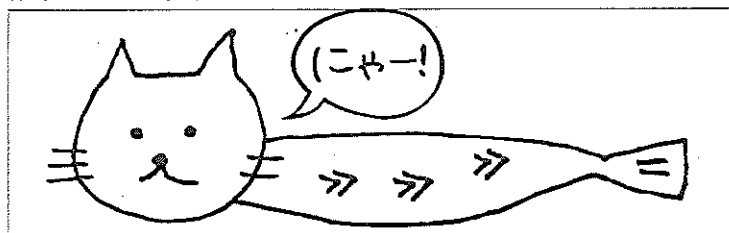
4月8日(土)～9日(日)

10時～17時 \*最終日は16時終了

会場●2階ギャラリー

主催●徳島クリエイターズマーケット事務局(川久保☎080・3162・2234)

■凄腕の「モノづくり人」達が集うマーケット。本町在住の川久保貴美子さんが呼びかけて実現。川久保さんは脱力系癒しキャラ《ししゃもネコ》を造形し、今や全国区にまで育て上げた超ユニークな作家です。ご注目ください。



## 日本舞踊 菊ノ上流菊丸会発表会

4月16日(日) 12時半～

会場●3階多目的ホール

入場無料

出演●菊ノ上流菊丸会

主催●菊ノ上流菊丸会(西☎088・698・8034)



## 創世ホール名画観賞会 25

### この世界の片隅に

6月10日(土) 2回上映

①10時半～ ②14時～

会場●3階多目的ホール

入場料●大学生・一般/前売1000円(当日1300円)、小・中・高当日のみ700円、シニア(60歳以上)当日のみ1000円

作品●「この世界の片隅に」(2016年、日本、126分)

声の出演=のん、細谷佳正、稲葉菜月ほか 原作=この史代 音楽=コトリング 監督・脚本=片淵須直

主催●創世ホール名画鑑賞会実行委員会(☎088・698・1100)

■第90回キネマ旬報ベストテン第1位、同監督賞受賞作品「この世界の片隅に」が、北島町で1日限りの上映決定! ■1944(昭和19)年2月。18歳のすずは、突然の縁談で軍港の街・呉に嫁ぐことになる。新しい家族には、夫・周作、周作の両親、義姉・径子、姪・晴美 ■配給物資がどんどん減ってゆく中でも、すずは工夫を凝らして食卓をにぎわせ、衣服を作り直し、時には好きな絵を描き、毎日の暮らしを積み重ねてゆく ■1945年3月。呉は、空を埋め尽くすほどの艦載機による大空襲を受ける。すずが大切にしていたものが失われてゆく。爆弾の炸裂によって彼女は右手を失い、幼い姪が命を落とすのだ ■それでも毎日は続く。そして1945年の夏がやってくる ■日本中の思いが結集! 百年先も伝えたい、珠玉のアニメーション ■主人公すずさんを演じるのは女優・のん(能年玲奈から改名)。監督が絶賛したその声で優しく、柔らかく、すずさんに息を吹き込んだ ■本作の音楽はコトリングが担当。ナチュラルで柔らかい歌声と曲想が、すずさんの世界を優しく包み込む ■皆さん、お見逃しなく。多数ご参集ください!



主演・のん、原作・この史代(双葉社刊)、音楽・コトリング、監督・片淵須直  
日本中の思いが結集! 100年先も伝えたい、珠玉のアニメーション

konosekai.jp

©2016 WBS / COPPOLE JAPAN

11歳以上

# 文◎化◎ジ◎ャ◎ー◎ナ◎ル

## 企画広報担当者日録●2017年3月

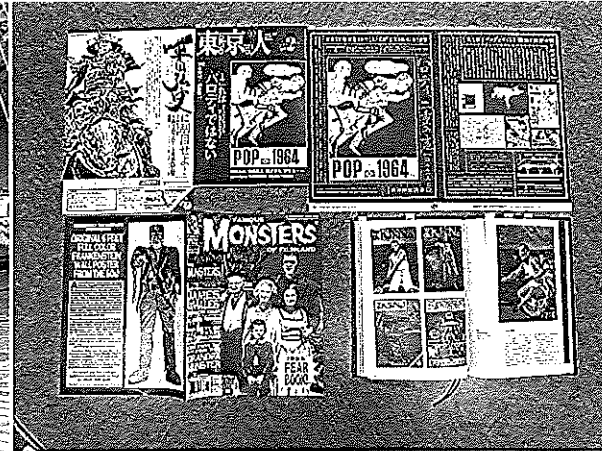
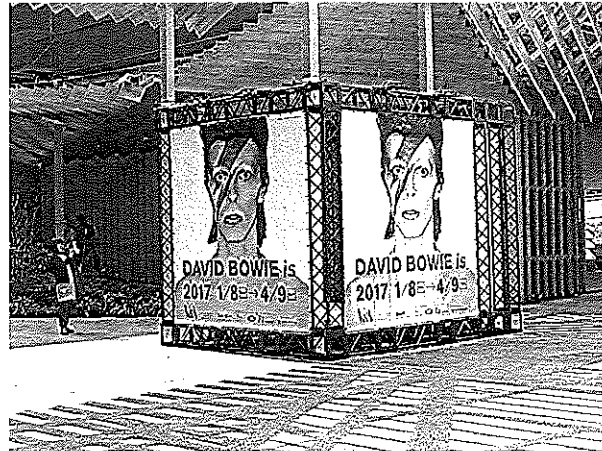
【2017年3月4日(土)】 ■妻と3泊4日の日程で東京訪問。朝一番の飛行機で東京入り。妻は、次男一家の住む国分寺に直行。私は、自由行動で新宿へ。JOJO広重氏(非常階段)、美川俊治氏(非常階段、インキャパンタツ)、石戸圭一氏(自主レーベルいぬん堂主宰)と昼食会。近況報告と情報交換をした。2月27日にお亡くなりになったモダン・ミュージックの生悦住英夫さんのことや、闘病中の地引雄一さんのことなど。以前は上京すると、京王線明大前駅に直行し、広重氏や地引氏や美川氏や石戸氏や生悦住さんとオムライスを食べるようなことをよくしていたのだ。会食の前後はもちろん、モダン・ミュージックの店内でバカ話をしてなごんでいたのだ。1980年前後、私は続々発売される自主制作レコードの大半を、モダン・ミュージックの通信販売で購入した。生悦住さんは気の利く人で、発送の際に、これこれの自主制作新譜もあるよという最新入荷盤のメモを同封して下さっていたのだ。1982年頃までの日本の自主制作盤は、だいたいコレクションできたと思うのだが、それはひとえにモダン・ミュージック店長・生悦住英夫さんのおかげだったといつてよい。生悦住さんに恩義を感じているミュージシャンは数多い。追悼メモリアル盤の企画が進行中とのことだった。

■石戸氏と一緒に根津に移動。弥生美術館の「平田弘史に括目せよ！」展を鑑賞。同館学芸員の松本品子さんにあいさつさせていただいた。展示会は素晴らしいものだった。大衆文化路線で、ていねいな足跡を刻み続け、遠くまで行こうとしている弥生美術館の姿勢はとて立派だと私は思う。

【3月5日(日)】 ■朝10時に国分寺駅を出て、浜松町でモノレールに乗り換えて天王洲アイルへ。軽く食事をして、12時から14時まで寺田倉庫ビル5階の「デヴィッド・ボウイis」展。同展は、ヘッドフォンを装着して観覧する方式で、その個数に限りがあるため事前予約が必要なのだ。私は2月段階でこの時間を予約してチケットを購入していた。少し早目に会場に着いたので1階のミュージアム・ショップにゆき、会場限定販売のアナログ盤2種類とポストカード・セットを購入。私は「地球に落ちてきた男」という映画が大好きなので、その展示コーナーをじっくり見た。

■15時、東京駅。駅ビル内にある東京ステーションギャラリーの「パロディ、二重の声」展を鑑賞。この展示会も立派なものだった。図録の構成も実に見事で、感服。ひとえに学芸員・成相肇(なりあい・はじめ)氏の力量と知的蓄積と日頃の研鑽のたまものである。

■16時、横尾忠則さんのビデオ・コーナーでサエキけんぞうさん(歌手、作詞家。徳島大学歯学部卒。千葉県在住)と合流。展示会の出口にある伊丹十三の映像作品(70年代の深夜枠で放映されたテレビ作品。物凄く良くできた現代アート論が展開される)と一緒に見て、会場前で記念写真を撮影。近くの喫茶店に移動し近況報告と情報交換。サエキさんは、18時東京駅出発で中西俊夫さん(元プラスチック)のお通夜に行かねばならないので黒ずくめの服装。必然的に、キース・エマーソンやグレッグ・レイクやジョン・ウェットンやかまやつひろしさんなど逝去したミュージシャンの話題になる。ザ・



スパイダース「真珠の涙」は、かまやつさんが手がけた屈指の名曲であるということ、見解が一致。「関西パンクの古参アーティストの友人(『イディオット・オクロック』~『ツメタイキノママ...』の高山謙一氏)とGSの曲で何が一番の名曲だろうかとお話したときに『真珠の涙』だろうなあ、ということになったのです」と言うと、サエキさんは「その方は、素晴らしい音楽の感性の持ち主だと思います」と称賛した。18時過ぎ、またの日の再会を約束し握手して別れた。

【3月6日(月)】 ■10時、JR国分寺駅改札で、瀬名堯彦さん(SF研究家、三一書房版『海野十三全集』編集委員)と合流。駅ビルの喫茶店で『海野十三読本』に関する打ち合わせ。

■12時、神楽坂駅で友人の横山壽信氏(聚珍社)と合流。食事しながら情報交換。「デヴィッド・ボウイis」展のチラシをいただく。

■14時、地下鉄森下駅そばの古書ドリスへ。古書ドリスは、喜多義治君という徳島県松茂町出身の男前の青年がやっている古本屋さんだ。2008年から2012年夏まで、北島町に奇跡のように存在していた古書店で、2012年12月に東京進出を果たしたのだ。創世ホールを応援してくれているので、東京に来るたびに一度は顔を出すように心がけている。私は、同店の百円コーナーと古い雑誌が平積みされた一角を見ていると幸せを感じる。90年代の洋雑誌『フェイス・モンスターズ・オヴ・フィルムランド』(アッカーマン責任編集)を見つけたので購入。

【3月7日(火)】 ■立川駅周辺を妻と探索。夕方、東京撤収。徳島に帰還。

【3月8日(水)】 ■15時、アビック社長・寺田成氏とテレビトクシマへ。3.11映画祭の宣伝で、16時から県内ケーブルテレビ局で同

時放送される生番組に出演。諸事情のため、映画の題名を言わないことになったのだが、視聴者には却ってそれが気になるのではというほろ苦い現象がそこはかとなくおこり、何となく楽しい気分。

【3月9日(木)】 ■勤務日ではない日。今日12時頃からFMびざんで「音戯ノ国の音ノ様」という1時間番組の収録があるので(一応小西がメインで進行役を務める回)、朝からねじり鉢巻きで原稿書き。1時間半ほど集中して台本を書き、ほぼ完成というところで、突然パソコンに異常が発生。朝から取り組んでいた原稿がすべて消失した。ちょうど、亡くなったジョン・ウェットンのことを記述していたら、画面が突然振動し始めて、過去に体験したことのないような現象に見舞われて、結果的に入力した文字が消えたのだ。急ぎよ早めにFMびざんに行き、手書きで原稿を書き対処した。放送は何とか無事に収録できた。何が起こるか分からないと思う。用意した楽曲は次の通り。①エマーソン、レイク&パーマー「エルサレム」、②サード・イヤール・バンド「フリース」、③サザンランド・ブラザーズ「ユー・ゴット・ミー・エニウエイ」、④マシューズ・サザン・コムフォート「ウッドストック」、⑤キング・クリムゾン「フォーリン・エンジェル」。放送日時は次のとおり。3月10日24時から25時、11日19時から20時、17日24時から25時、18日19時から20時。

【3月11日(土)】 ■《3.11映画祭in徳島2017「太陽の蓋」上映会》。15時からと18時半からの2回上映で、会場は2階ハイビジョン・シアター。合計124名の入場者数で、全国的にもダントツの入り。第1回目の時は、エンドクレジットが終わると拍手が起こった。この国の行く末と被災者の痛みをしっかりとみすえた、誠実で立派な内容の作品だった。(2017年03月31日脱稿、文責=北島町創世ホール囃子小西昌幸)